



新刊紹介
追悼文
彙報

卷頭言
論説

研究の再構築

『史記』日者列伝と漢代「日書」の関係に関する再検討

王景創 (柿沼陽平訳)

飯山 知保

李鴻章の丁憂と帰任再考

柏 天野

中華民国時期江蘇省南通県金沙鎮における農村経済の発展

——頭総廟を例として——

弁納 才一

翻訳論説

古代中華帝国形成期における財政の変容

マキシム・コロルコフ
(柿沼陽平訳)

——前四世紀後半から前一世紀を中心に——(下)

才一

森林之子 林光演先生訪問記録

蕭慧琴・陳淑容 (弁納 才一訳)

訳注

『慈漢黄氏日抄分類』申明訳注その五

卷七二 申明三 第三任分司鎮江條陳轉般倉事(上)

宋代史ゼミナール

紀行文

金牛道広元・梓潼段沿線三国関連遺跡踏査記

柿沼陽平・王博・鮫島玄樹

河南省許昌市三国志関連遺跡踏査記

柿沼陽平・王博・鮫島玄樹・平林優一

二〇二五年朝鮮古代遺跡踏査記

韓相賢・福島理生・森田大智
笠井雄元・小川清香・油屋凜々香

陝西省南部・甘肅省南部秦漢三国史跡等踏査記

加計翔成・斎藤賢
新津健一郎・峰雪幸人

二〇二五年夏渤海国史跡調査紀行

王一嘯・栗林聡・盛嘉

——上京城址・敖東城址・六頂山墓葬・中京城址・鴻臚井の碑——

平林 優一

野中 敬

293 289 287 261 225 193 163 139 95 79 67 45 21 2 1

金牛道広元・梓潼段沿線三国関連遺跡踏査記

柿沼陽平・王博・鮫島玄樹

はじめに

二〇二五年四月三日～七日、柿沼陽平・王博・鮫島玄樹は、四川省広元市～綿陽市梓潼県(図1A・B)の金牛道沿いの三国時代関連遺跡を踏査し、博物館内で関連資料を見学した。¹⁾

四月三日(木) 移動日

鮫島は北京大興空港一〇時発のMU二一〇六便で西安咸陽国際空港へ。西安地下鉄一四号線に乗り、秦宮駅で下車。一三時三三分、陝西歴史博物館秦漢館見学。以前は参観予約が困難だったが、問題なく予約をとれた。大規模な博物館で展示品も豊富²⁾。参観後、地下鉄一四号線で西安北駅へ移動。

一八時一〇分発のD一九七五で広元駅に移動。天悦酒店に宿泊。王は北京首都国際空港一三時発のCA四一〇二便で成都双流空港へ。空港付近の成都空港悦享酒店に宿泊。柿沼は北京首都国際空港二〇時三〇分発のCA四一〇六便で成都双流空港へ。空港付近の成都空港悦享酒店に宿泊。

四月四日(金)

王は成都双流空港七時四七分発のD一九一二で広元駅に着。柿沼は成都双流空港八時〇七分発のD一九八六で広元駅に着。一〇時一〇分頃に全員集合し、レンタカーで広元市博物館へ。

一一時頃、広元市博物館(32°25'42"N 105°51'35"E)に着(本稿では座標を付記するが、現地法令をふまえて中国国内での座標取得は行わなかった。付記する座標は、帰国後に



図1 A 広元市・綿陽市

(Googleアースなどを用いて確認したものである)。参観無料・予約不要。外国人は受付でパスポートを提示し登記すれば参観可。展示は石器時代から近現代まで比較的豊富で、古代の蜀道や船棺葬、巴蜀記号のある青銅器がとくに興味深い。参観終了後、土産物屋で書籍を物色したかったのだが、それらしきものは無かった。付近で昼食。

皇沢寺 (32°26'29"N 105°48'39"E) へ。清明節の連休中ゆえ駐車場は満車。近隣に駐車し、徒歩で寺院入口へ。一二時五五分、皇沢寺に入場。入場券は五〇元。予約なしで入場可。

皇沢寺は則天武后を祀る寺で、則天武后創建ともいわれる。『大明一統志』巻七四利州条に「皇澤寺、在廣元縣西、唐武則天創建」とあり、明代後半から出た説か。一二〇〇体にのぼる石仏があり、北魏に溯る⁽³⁾。広元市は一説に則天武后の出生地とされ、市内各所に「女皇故里」をアピールする文言がみえる。実際には則天武后出生地には諸説あり、利州説・長安説・揚州説・洛陽説に大別できる。利州(現広元)出生説は、郭沫若の戯曲「武則天」にはじまり、郭沫若自身の論文もあり⁽⁴⁾、李商隱の詩や各種石刻等を根拠とする⁽⁵⁾。長安説は陳振が主唱し⁽⁶⁾、則天武后の享年から出生年を推定し、当該年に則天武后の父母の所在地が長安だった点を論拠とする。一方、李樹桐は同様の手法で揚州説を、王滌武や王愷は洛陽説を主張するが⁽⁸⁾、支持は多くない。一方、『旧唐書』・『新唐書』等⁽⁷⁾をみるかぎり、則天武后の本籍は文水県(并州もしくは汾州)

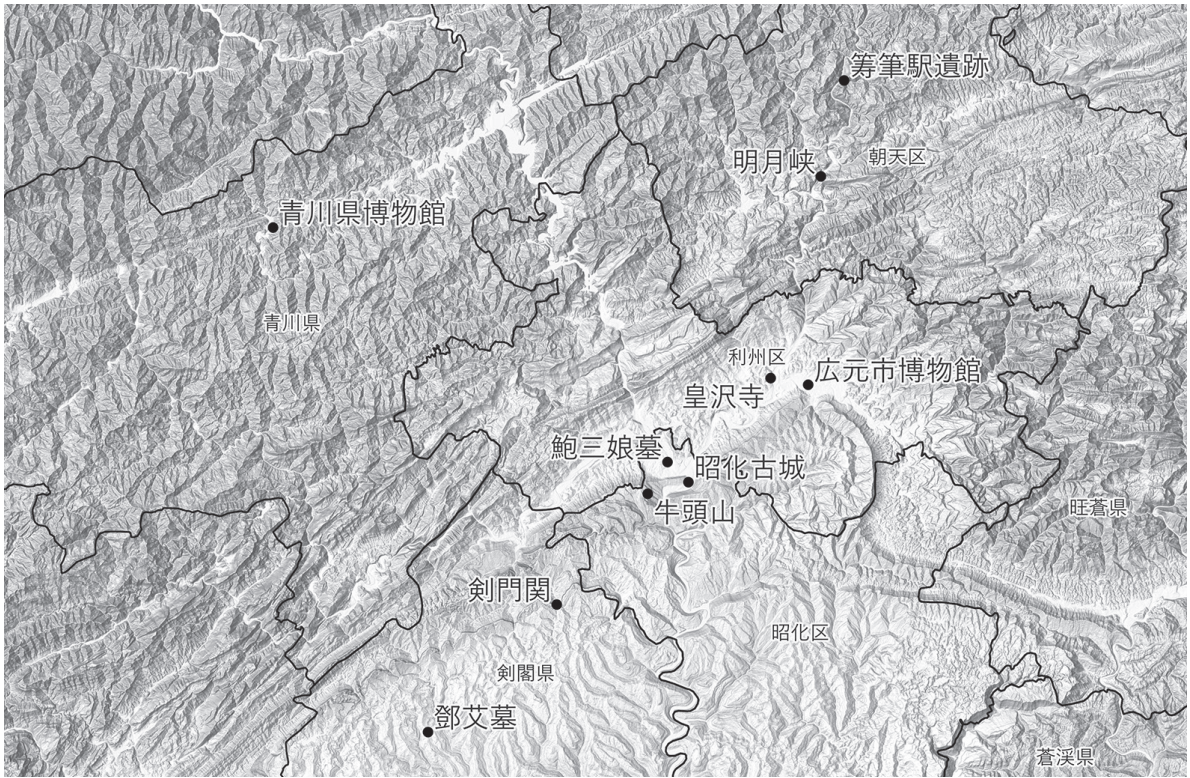


図1B 広元一帯

である。^⑨

皇沢寺内には二聖殿があり、中心に中宗像・則天武后像、左右に功臣像がある。寺の奥には石仏・石碑がある。現地の解説文によれば北周〜五代に五七ヶ所・一二〇〇体余の像が彫られたとか。北側には女皇文化陳列館もあり、皇沢寺関連の遺物や則天武后の事績に関わる展示がみられる。南側には武氏家廟があり、則天武后の家族の像がある。武氏家廟前の階段を降りると、顔真卿ゆかりの写心経洞もある。

皇沢寺を出発し、G五（京昆高速）で朝天区へ。一五時〇五分、明月峡（32°38'05"N 105°52'10"E）到着（図2）。明月峡はかつて蜀道が通った峡谷で、古代の栈橋跡が残る。「明月峡」の地名は唐詩にも散見するが、当該明月峡とは別物。^⑩朝天区の明月峡はもともと朝天峡といい、宋代地理書にみえ、栈橋があった。^⑪明代地方志に「朝天水駅」もみえる。^⑫

現地解説文によれば、明月峡は秦の滅蜀や諸葛北伐で利用されたという。そして、もともとは秦王が牛の像を刻んでその後に黄金を置き、金糞を出す牛だと偽り、騙された蜀王が牛を連れ帰るべく道を敷設したため、ここに秦―蜀間の道が開通し、金牛道とよばれるようになったという。だが、金牛道の場所とその時代的変遷には諸説あり、^⑬現在の漢中市勉県〜広元市劍門関に絞ると、以下の説が有力である。すなわち、秦漢時代の金牛道は陽平関・白水関を通り、現青川県東部を白竜江沿いに南下し、昭化古城を経て劍門関に至る。唐宋時



図2 明月峡

代の金牛道は陽平関を経て嘉陵江沿いに南下し、現在の軍師廟村や明月峡、広元市中心部を経て昭化古城・剣門関に至る。元明清時代の金牛道は寧強県・七盤関を経て明月峡に至り、唐宋金牛道に合流する。そして秦漢金牛道の原型は先秦時代に遡り、戦国時代の大幅改修を経て、秦の滅蜀や諸葛亮の北伐に用いられたはずである。以上の通説によれば、明月峡は諸葛北伐と無関係であろう。秦漢金牛道付近には実際に秦漢遺跡が多く、唐宋以降の遺跡は乏しい。『文物地図集』を参考にすれば、朝天区・利州区・青川県の金牛道沿いの戦国秦漢魏晋期遺跡は図3のごとくである⁽¹⁶⁾。

明月峡は現在観光地化して国家AAA級旅行区に指定されている。入口は北にあり、入場料は大人七〇元。峡谷内には嘉陵江沿いに南北約2kmの遊歩道があり、小型バスによる往来も可能。遊歩道は二つあり、上には民国期の川陝公路を基礎とする遊歩道、下には「先秦古道」という栈橋があり、ところどころで岩盤に開いた方形の穴がある(図4)。これは古栈橋の部材が打ち込まれた跡で、深さ七五cm、幅四五cm程。明月峡全体で四〇〇ヶ所もあるらしい。遊歩道上には、金牛道の由来になった牛の記念像や、蜀道関連故事のレリーフがあった。南端に中国朝天栈道文化陳列館があり、関連遺物の他、歴代金牛道の変遷に関する展示があった。蜀道に関わる書籍・論文等も展示されていた。二時間程滞在し、復路は小型バスで駐車場に戻る。

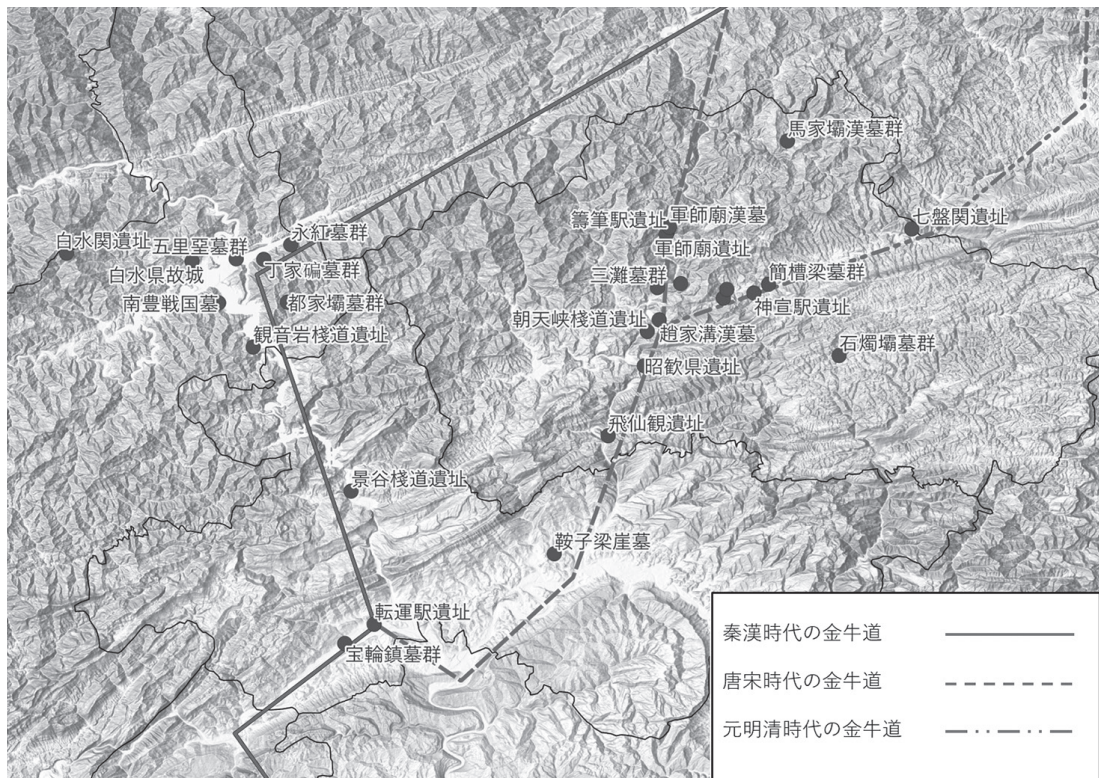


図3 金牛道周辺戦国秦漢魏晋遺址



図4 栈橋跡

一七時頃、明月峡から朝天区市街地を抜け、嘉陵江沿いにS四一〇を北上して籌筆駅遺跡(32°43'19"N 105°33'21"E)へ。「籌筆駅」は古代の駅名のひとつで、一説には諸葛亮が北伐時に駐屯して作戦を立てたとされる⁽¹⁷⁾。唐代以降、杜牧・李商隱・陸游等の詩人が多く「籌筆駅」と題する詩を遺した。だが本来その候補地には神宣駅説・朝天駅説・軍師廟村説がある。神宣駅説は、明清地方志や旅行記等にみられ、藍勇・劉玉国・張朝碧によって整理されている⁽¹⁸⁾。神宣駅は元代以降の金牛道沿いに存在した。朝天駅説は『読史方輿紀要』等にもみえ、藍勇・粟舜成等が支持⁽¹⁹⁾。軍師廟村説は『道光』広元県志等にみえ、劉玉国・張朝碧等が主張⁽²⁰⁾。『文物地図集』は籌筆

駅遺跡が朝天鎮烟墩村北二〇〇mにあるとし、これは軍師廟村付近に当たる（だが地図上のマーカーは朝天区政府付近に打たれ、位置が大幅にずれている²¹）。「籌筆駅遺址」碑（広元市重点文物保護単位）も軍師廟村にある。神宣駅説は、神宣駅が明清道路上にあつて唐宋籌筆駅と一致しないので成立しがたく、残る朝天駅説と軍師廟村説のどちらが妥当かは不明ともかく籌筆駅は唐代以後の詩にみえ、唐宋金牛道上に位置し、三国時代の金牛道とは無関係のはずである。既述の通り、秦漢金牛道は陽平関・白水関を通り、現青川県西部を白竜江沿いに南下するルートで、実際に付近には棧橋遺跡があり²²、陳式が劉備の命令で駐屯し、徐晃に敗れたとされる場所もある²³。現在の軍師廟村や朝天区中心にも漢代遺跡があるので、そこに人の往来があつたことは否めないが、秦漢金牛道の主要路ではない。

一八時〇四分、軍師廟村の籌筆駅遺跡に到着。軍師廟大橋の南側手前のカーブ（S四一〇沿い）に、「三国遺址籌筆駅」碑（図5）と「籌筆駅遺址」碑（広元市重点文物保護単位）がある。軍師廟村の名は諸葛亮廟に由来し、当該廟は蜀漢西晋頃に遡るとか²⁴。明清地方志にはみえないが、宋の陆游は籌筆駅に武侯祠があつたとする²⁵。なお『文物地図集』は籌筆駅遺跡を唐代の駅とし、関楼等が残るとし、軍師廟遺跡には蜀漢西晋頃の廟があり、漢代遺物が出土したとするが、付近には石碑以外の関楼や廟の遺跡は見当たらない。百度地図をみ



図5 「三国遺址籌筆駅」碑

る限り、当該地点の北東二キロ程の場所に別途「籌筆駅遺址」があり、関楼等もあるらしいが、車で近くに行つても具体的な場所は判然としなかった。また四川省文物考古研究院と西安美術学院中国芸術与考古研究所は、軍師廟遺跡を三灘溝南側の扇状地（東西一二〇m、南北七〇m）にあるとし、軍師廟遺跡―籌筆駅遺跡間を六〇〇mとするが、やはり百度地図をみる限りでは位置がズレており、三灘溝は軍師廟村南約三キロのはずである。悪路や時間の問題により、結局これ以上の調査は断念せざるをえなかった。 劍閣県へ移動。麗楓酒店に宿泊。

四月五日（土）

九時に出発。G五（京昆高速）を東進して昭化古城方面へ。高速を下り、白竜江に沿って南下すると、道中に鮑三娘墓（32°21.46'N 105°41.10'E）（図9）があった。鮑三娘は『花関索伝』に登場する架空の人物。同じく架空の、関羽の子関索と結婚した。現地解説文によれば、鍾会・鄧艾の侵攻時に関索・鮑三娘夫妻は戦死したとか。明清地方志には、昭化城近くに関索城があり、関索が駐屯した場所だともある⁽²⁸⁾。もともと、『花関索伝』において関索・鮑三娘は南征中に亡くなっている⁽²⁹⁾。よって鮑三娘墓は『花関索伝』と異なる伝承による。清代地方志によれば、昭化県の北一五里に鮑三娘墓があり、かつて墓門が露出したことがあったが、内部は真っ暗で誰も入ろうとせず、門を閉ざしたという⁽³⁰⁾。のち一九一四年にフランス人医師で、考古発掘にも従事したヴィクトル・セガレンが発掘調査を行った。その報告書によれば、墓室の長さは五・四m、幅は一・九mで、北側壁面は崩壊し、内部に棺等のみえず、額の骨があった。壁や天井は画像磚で、漢式だという⁽³¹⁾。ここに誰かの墓があったことは確かなようである。現地は小さな公園のごとくで、入口に四川省文物保护单位碑と、解説の看板があり、また「漢將軍索妻關夫人之墓」碑（民国期）があり、墓全体は樹木に覆われていた。北側の崩壊箇所は外からも確認できた。

鮑三娘墓から南下し、一〇時〇七分、昭化古城（32°20'16"N



図6 鮑三娘墓

105°42'55"E) に到着。昭化古城は漢代葭萌県城。かつて蜀王が弟葭萌を当地に封建して苴侯としたことから、葭萌とよばれるようになった。苴侯は巴と友好関係にあったため、蜀に攻撃され、巴に逃げて秦の恵文王に援軍を求めた。恵文王はこれに乗じて張儀・司馬錯を派遣し、蜀・巴・苴を全て滅ぼした。このとき葭萌県が設けられた⁽³²⁾。のち劉備が入蜀時に葭萌県に駐屯して成都を攻め、霍峻を葭萌県に残して後方を守らせた⁽³³⁾。蜀平定後に葭萌県を漢寿県に改名し、西晋は晋寿県に改名した⁽³⁴⁾。宋代以降は昭化といい、多くの史跡が現存する。昭化古城北側対岸の土基壩には別途、葭萌関遺跡がある。付近からは戦国～漢代の墓や西周城跡が発見されている⁽³⁵⁾。現在、昭化古城は観光地化し、いくつかの史跡は有料。城内外は賑やかで、所狭しと露店が並び、人混みでまっすぐ歩けない程だった。昭化県署・考棚・文廟・八卦井・漢代城壁遺址・戦勝壩・敬侯祠・費禕墓・城隍廟・昭化漢城博物館を見学し、城壁に登って景色を一望した。現地解説文によると、県署・考棚・文廟・城隍廟等は二〇〇八年頃に修復された。漢代城壁遺跡は城の南側にあり、漢代以来修復を重ねている。昭化漢城博物館は清代龍門書院に基づき、小規模ながら画像磚・明器・漢墓墓室等がある。戦勝壩は西側城外の古戦場で、張飛と馬超が夜戦をした場所だとか。敬侯祠はその西側にある費禕の廟で、費禕墓がある(図7)。費禕墓は『華陽国志』にみえ、明清地方志でも触れられている⁽³⁶⁾。墓前に「蜀漢大將



図7 費禕墓

軍録尚書事成郷敬侯費禕之墓」碑(光緒年間)がある。なお費禕墓の西には城関漢墓があり、前漢墓で、一九八五年に青銅器・陶器が発掘された⁽³⁷⁾。『華陽国志』によれば、近辺には大姓の墓が多かったはずである。実際、二〇一三年には昭化古城北側で大規模な漢墓群がみつかかり、二〇一四年までに七九基の墓から九〇〇件以上の出土品が発掘されている⁽³⁸⁾。

昭化古城見学後、車で西の牛頭山(32.1920°N 105.3947°E)へ。牛頭山は、姜維が駐屯したという山。太上老君にまつわる伝説や、姜維軍が馬を放した攔馬槽、姜維の点将台、姜維井(図8)等がある。姜維井の現地解説文によれば、姜維は牛頭山防衛時に水不足に陥ったが、夢に諸葛亮が現れて姜維



図8 姜維古井

に祭祀を行わせたところ、井戸が湧いたので助かったという。一連の牛頭山と姜維にまつわる故事の出所は不明で、管見の限り明清地方志でも確認できない。頂上には牛王観なる道観があり、道教の神像とともに、「諸葛尊神」「姜維大將軍」の位牌があった。山道は基本的に階段で、牛王観までは南北二道あり、我々は北道を上り、南道を下りた。やや急ぎ足で一時間余で往復できた。頂上からは昭化古城を眼下に一望でき(図9)、三方が嘉陵江、西が山に囲まれた堅城との印象を受けた。なお牛頭山北側には天雄関なる後世の関所遺跡もある。

牛頭山下山時にすでに一五時だったが、G七五(蘭海高速)で青川県へ。青川県は現在小規模で、魏晋南北朝以降の遺跡も少ないが、青川県東部から利州区にかけての白竜江沿いには、棧橋跡も含め、多数の戦国秦漢遺跡がある。⁽³⁹⁾これは、戦国秦漢時代の金牛道が白竜江沿いを通っていたためであろう。のちに金牛道の位置が変わった結果、人流が減少したと思われる。白竜江沿いには三国時代の伝承もあり、地方志には武侯祠(もと鄧艾祠)⁽⁴⁰⁾や、劉備の命令で陳式が駐屯した場所がみえる。⁽⁴¹⁾

一六時四〇分、青川県博物館(32°34'59"N 105°14'14"E)に到着。以前から何度か連絡を取っていたため、職員の方に挨拶したのち、展示室を御案内いただいた。青川県博物館の南側すぐ、喬荘中学の隣に郝家坪戦国墓群がある。一九七九



図9 昭化古城遠景

年に発見された戦国墓群で、一九七九～一九八〇年に七二基、二〇一〇年に三四基発掘された⁽⁴²⁾。特筆すべき出土品は五〇号墓出土木牘で、①王命による田律の改正、②新たな律令の内容、③律令の実施過程が窺え⁽⁴³⁾、秦代の土地制度を説明するうえで重要である。今回、我々が青川県を訪問したのは、本木牘の出土地と、周辺の環境を見ておきたかったからである。郝家坪戦国墓群は現在公園となっており、博物館職員の案内で見学した。青川県博物館は近く喬莊中学のほうに移転する予定だとか。

見学終了後、劍閣県に戻る。劍閣名物の豆腐料理で夕食を済ませ、麗楓酒店に宿泊。

四月六日（日）

九時、劍門関（32°13'44"N 105°33'34"E）に出发。九時半に北口到着。劍門関とは、姜維が立て籠もって鍾会と戦った「劍閣」⁽⁴⁴⁾で、唐代の李白によって「劍閣崢嶸而崔嵬、一夫當關、萬夫莫開」（李白「蜀道難」）とも謳われた、難攻不落の関所である。『水経注』卷二〇漾水注は「小劍戍」から「大劍」までの険しい山々を「劍閣」とよび⁽⁴⁵⁾、『元和郡県図志』卷二二利州条は同区間を劍閣道とよぶ⁽⁴⁶⁾。「大劍」は現在の劍門関を、「小劍」は現在の劍閣県城跡をさす⁽⁴⁷⁾。周囲は観光地化し、トレッキングに訪れる人も多い。鳥道という断崖絶壁の道やケーブルカー、ヘリコプター遊覧まで用意されている。朝九時半頃

に公式の駐車場は一杯だった。多数の飲食店があつて別途駐車場を貸し出している。我々はうち一軒の呼び込みに応じて駐車したが、半ば騙されたようなものであった。一〇〇元の食券を先に購入し、あとで食事をしに来るならタダで駐車できるというのだが、店先でお金を払った途端、実際の駐車場は別の場所だと知らされた。結局、急坂を登って徒歩一〇分くらいの場所に車を停めさせられた。昼は一〇〇元ぶんきっちり食事をさせてもらった。

北口から一五分程登ると、櫓型の展望台（鍾会故壘）に到着。現地の解説文によれば、チケット売り場一帯が鍾会の駐屯地だったと目され、展望台から一望でき、剣門関関楼も左側に遠目に見える（図10）。関楼の両側は断崖絶壁で、関楼以外に通過可能な道はない。

入口に戻ったのち、柿沼は徒歩、王・鮫島は車で南口へ。入口～関楼の徒歩の道は平坦。南口到着後、王は車内で待機、鮫島は関楼へ。一二時、柿沼・鮫島が関楼で合流。一五分程かけて姜維祠・姜維墓（図11）へ。劉備等の彫刻・石像の他、姜維の横顔にみえるという岩、「第一關」碑、姜維点将台を経て剣門関姜維祠⁽⁴⁸⁾へ。姜維祠の背後に姜維墓がある。現地解説文によると衣冠冢で、すでに二度の移設を経ている。

昼食後、G一〇八（京昆線）を南下し、剣閣県南部の鄧艾墓（32°05'36"N 105°24'57"E）へ。一四時〇三分到着。劍州鄧艾墓は明清地方志にみえ、唐代に鄧艾廟碑が建てられた記



図10 剣門関遠景



図11 姜維墓

録もある⁽³⁰⁾。鄧艾墓は陝西省渭南市にもある。前者は二〇一七
年に修繕され、入口に「鄧艾鄧忠陵園」と大書され、下に「全
球鄧氏修建」とある。寄付者名をしるした碑があり、中国以
外にシンガポールからの寄付もある。園内には鄧艾・鄧忠親
子の墓があり、各々「魏征西將軍彰順王鄧艾墓」、「魏右將軍
惠唐亭侯鄧忠墓」と記される(図12)。「彰順王」とは五代十
国の前蜀天漢元年(九一七年)に贈られた称号である⁽³¹⁾。

鄧艾墓から梓潼県(図13)へ。G五(京昆高速)で江油市
にゆき、G三四七に沿って東進し、事故現場や渋滞に遭遇し
つつ、一六時二一分に葛山寺(31°39'39"N 105°02'40"E)(図
13・図14)到着。一帯は臥竜山とも亮山ともよばれ、明清地
方志に武侯祠がみえ、諸葛亮の駐屯所だったとする⁽³²⁾。現在は
臥竜山景区となっている。葛山寺の裏に景福院仏龕寺があり、
「景福院重建碑記」(一九八六年梓潼県人民政府)がある。こ
れによると仏龕寺は葛山の麓にあり、元來諸葛亮を祀ったも
ので、山上に武侯祠遺址・諸葛塞・孔明泉・八卦泉・栓馬樹
等があった。梁の武帝の仏教崇拜時に拡張して景福院となり、
唐宋時代に石仏が彫られて仏龕寺と改名した。文革による破
壊後、再建された。なお碑の左端に「大清同治五年」とあり、
現碑は清碑を削りなおしたのか。

葛山寺は現在地元民の「雀莊」と化していた。裏手に回
ると景福院仏龕寺があり、壁に「葛山寺三国旅游景点管理委員
会」の看板と、「梓潼県三国演義学会分布図」なる地図が掛かっ



图12 鄧艾墓

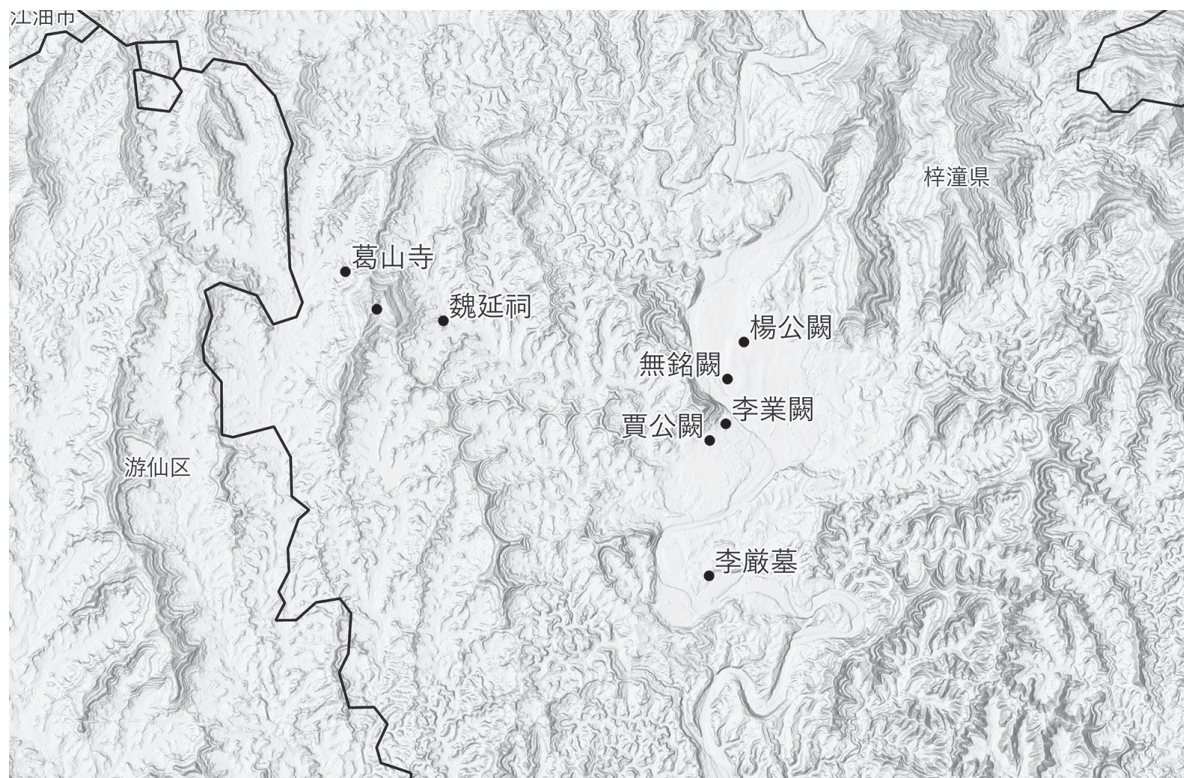


图13 梓潼县付近



図14 葛山寺

ている。管理人らしき方がおり、梓潼県三国演義学会の会長宋作富氏とのこと。同会は唯一の県級三国演義学会で、一九八五年に設立され、現在一四〇名程の会員がいる。発行誌は五〇期を数え、毎年学術活動を展開し、諸外国の学者も活動に招かれたことがある。会誌には、地元の三国志関連遺址や伝承の紹介のほか、新発見の遺跡調査報告等も掲載され、寄稿者には政府関係者も含まれ、地元政府の文化活動や旅行産業振興に協力・貢献している様子が窺える。⁵³臥竜山周辺三国志関連遺跡には梓潼県三国演義学会による石碑が多くあった。会誌や現地碑の内容が史実かはともかく、現代における伝承の創造・伝播の過程をしめすものという意味で、梓潼県三国演義学会の活動は興味深い。なお宋氏からは会誌を御恵贈いただき、かつ前掲「雀荘」の奥の諸葛堂(図15)を御案内いただいた。諸葛亮像に向き合うように古い舞台があり、観劇する場所だとか。諸葛堂前で記念撮影。

一七時〇八分、魏延祠(31°38'53"N 105°04'21"E)(図16)に到着。本廟は明清地方志等にみえないが、梓潼県三国演義学会会誌や「魏延率兵駐此証碑記」(一九九六年梓潼県三国演義学会建立)によれば、魏延の駐屯地に由来し、かつては「魏延率兵駐此」碑もあったが、六〇年代に廟・碑ともに破壊され、高齢の現地民の目撃談が残るのみという。また近くの魏家河に「將軍橋」があり、魏延にちなんだものとか。⁵⁴魏延祠入口は鉄板で閉ざされ、内部はみれない。



图15 葛山寺諸葛堂



图16 魏延祠

続いて臥竜山景区 (31°39'08"N 105°03'14"E) へ。西側から道なりに進むと駐車場に行きつき、そこから歩いてすぐのところ、臥竜山千仏岩石窟(全国重点文物保护单位)があり、状態良好な唐代石仏がみられる。諸葛亮像もあった。閉門時間近くだったため、急ぎぎみに見学。車で一キロ程進むと「孔明泉」(図17)がある。地方志にもみえ、御堂内にきれいな湧き水があり、諸葛亮像等が置かれている。堂前の碑に「諸葛寨飲馬池」とある。隣接する建物内では職人が仏の泥像を作成中だった。堂を出て右に進むと諸葛喬墓(図18)がある。諸葛喬は諸葛謹の次男で、諸葛亮の養子になった人物。当該墓は地方志等にもみえない。現地の「重建諸葛喬墓碑記」(梓潼県三国演義学会)によれば、諸葛喬は北伐従軍時に兵糧運搬に失敗し、臥竜山で反省した。また孔明泉を活用して北伐時の蜀兵に酒を振る舞い、諸葛亮に褒められたとか。だが当該伝承の出所は不明。墓は二〇〇〇年再建。見学後、梓潼県中心部へ。市街地で夕食後、綿陽梓潼崇文半月万信至格酒店に宿泊。

四月七日(月)

九時に出発し、李巖墓 (31°35'15"N 105°08'59"E) へ。九時半到着。当該墓は明清地方志等にもみえないが、前掲「梓潼県三国演義学会分布図」(景福院仏龕寺)や梓潼県三国演義学会会誌にみえるので、急遽旅程に入れた。³⁶⁾梓潼県市街地か



図18 諸葛喬墓

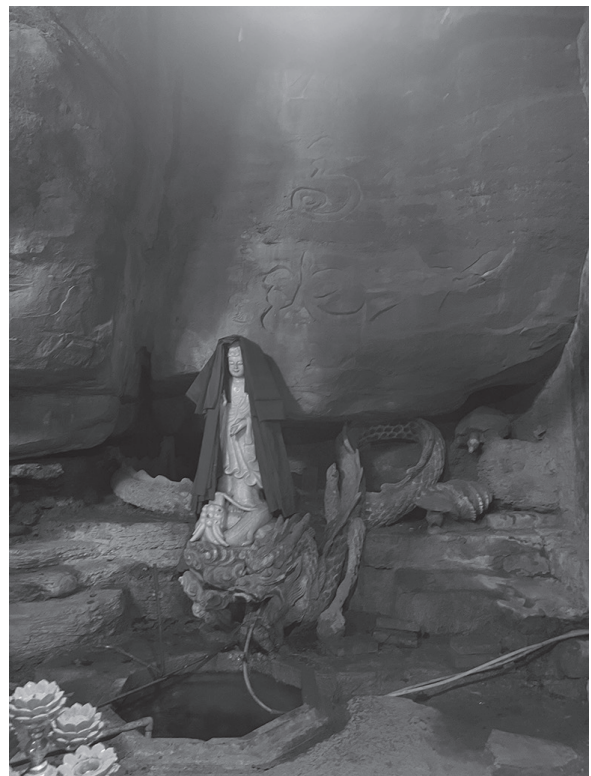


図17 孔明泉

ら南の柴壩村の葫芦包(図19)である。梓潼県三国演義学会
会員が二〇二四年に赴いて李仕通なる老人から話を聞いたと
ころ、かつては「李嚴」と書かれた石碑があったが、のちに
橋の建設に使われてなくなったとか。⁽⁵⁷⁾ 正確な位置は不明ゆえ、
近隣の老人に御案内いただいたが、現代の墓は多いものの、
捜査は難航。李仕通氏にも会えたが、子供の頃のことによく
覚えていないとのこと。結局未発見に終わった。

梓潼県市街地に戻り、漢代墓闕を見学。梓潼県には四点の
漢代墓闕があり、互いに近い。

一〇時〇八分、賈公闕(31°37'11"N 105°08'59"E)(図20)
に到着。文昌路の脇にある。右闕に「蜀中□□/□公□□」
とみえ、「蜀中書令」・「賈公之闕」とする説もあるが、地方
志所見の鄧芝墓とする説もある。⁽⁵⁸⁾ 地元民は「書箱石」とよ
ぶ。⁽⁵⁹⁾ 左右の闕が残るが、風化がひどく、文字らしきものもな
い。闕は屋根付きで道路脇に置かれ、解説の看板がある。

一〇時二四分、賈公闕から北東に六〇〇m程の李業闕(31
°37'26"N 105°09'12"E)(図21)に到着。李業は『後漢書』に
立伝される。⁽⁶⁰⁾ 李業闕は状態がよく、「漢侍御史/李公之闕」
と明記されている。関連記録は宋代にみえ、清代地方志に李
公祠の記述もある。⁽⁶¹⁾ 付近には李業闕に関する明清石碑もあり、
屋根付きで保存されている。論者のなかには、形状・文字等
の状況から、当該闕を後世の作とする者もいる。⁽⁶²⁾

一〇時四一分、李業闕から一二〇〇m、梓江東岸にある無



図19 葫芦包



図20 賈公闕

銘闕 (31°38'04"N 105°09'15"E) (図22) に到着。辺韶の墓とする説もある。⁽⁶³⁾ 賑やかな中和街の真ん中に現存し、車が突っ込んだら粉粉になりそうである。

一一時〇三分、無銘闕から一〇〇〇m、文昌花園の楊公闕 (31°38'36"N 105°09'30"E) (図23) に到着。「蜀故侍中楊公之闕」とあり、後世に刻まれたものとされるが、⁽⁶⁴⁾ 墓闕自体は後漢末期のものらしい。文昌花園の地元民に聞いてもなかなか場所がわからず、興味がないようである。

広元市に戻る。一三時一〇分頃、広元盤竜空港到着。駐車場でレンタカーを返却し、チェックインと安全検査を済ませて昼食。広元盤竜空港一四時四〇分発のCA一四五八便で北



図21 李業闕



図23 楊公關



図22 無銘關

京首都国際空港へ。北京で解散。

注

- (1) 地図は、高德開放平台 (https://datav.aliyun.com/portal/school/atlas/area_selector) の行政区分情報より Arc GIS (https://doc.arcgis.com/en/data-appliance/2022/maps/world-hillshade.htm?utm_source=chatgpt.com) の地形情報をもとに作成した。
- (2) 斎藤賢・田熊敬之・新津健一郎・峰雪幸人「陝西省西安市・青海省内史跡等踏査記」(『史滴』第九六号、二〇二四年、二九二頁)。
- (3) 主な調査記録にヴィクトル・セガレン(馮承鈞訳)『中国西部考古記』(上海古籍出版社、二〇一四年、二六〇～二八頁)、張明善・黄展岳「四川広元県皇沢寺調査記」(『考古』一九六〇年第七期、五三～五六頁)、広元市文物管理所・中国社会科学院宗教所仏教室「広元皇沢寺石窟調査記」(『文物』一九九〇年第六期、二四～二九、三三頁)、広元市文物管理所・成都市文物考古研究所・北京大學考古文博学院「広元皇沢寺石窟調査報告」(『四川文物』二〇〇四年第一期、七五～八四頁)等。
- (4) 郭沫若「武則天出生在広元の根拠」(『光明日報』一九六一年五月二八日、二頁)。
- (5) 郭沫若「武則天」(人民文學出版社、一九七九年)、李興榮「武則天出生時間地点考辨」(『史學月刊』一九九二年第三期、一一一頁)、胡戟「武則天本伝」(陝西師範大學出版社、一九九八年)、陳洋「解密武則天的出生時間和出生地」(『乾陵文化研究』第四号、二〇〇八年、四二五～四三四頁)、韓昇「武則天的家世與生年新探」(『厦門大學學報(哲學社會科學版)』二〇〇二年第一期、六四～七一頁)、杜成慧・胡玉平「護国司南抄」可証武則天誕生於利州」(『四川文理學院學報』第三五卷第二期、二〇二五年、七四～八二頁)。なお氣賀沢保規「則天武后」(白帝社、一九九五年、九～一八頁)は武

后出生年の議論を整理している。

- (6) 陳振「也談武則天的出生地和出身」(『光明日報』一九六一年五月二四日、四頁)。長安説は、李端科「也談武則天的出生地」(『學術月刊』一九八二年第四期、八一頁)、李端科「再談武則天的出生地」(『學術月刊』一九八四年第一〇期、四〇頁)、趙文潤「武則天評伝」(三秦出版社、二〇〇〇年)、雷家驥「武則天伝」(人民出版社、二〇〇八年)、李永「武則天出生於洛陽說考辨——兼及武則天出生地的學術公案」(『乾陵文化研究』第八卷、二〇一四年、七八〜八四頁)、李永「武則天與長安相関史事研究述評」(『中國史研究動態』二〇一二年第五期、四八〜五四頁)など。
- (7) 李樹桐『唐史索隱』(台灣商務印書館、一九八八年、一〇四〜一八頁)。
- (8) 王滌武『武則天時代』(廈門大學出版社、一九九一年、五六頁)、王愷「洛陽——武則天出生地」(『尋根』二〇一一年第五期、一三六〜一三八頁)。
- (9) 『旧唐書』卷六則天皇后本紀「則天皇后武氏諱嬰、并州文水人也」、『新唐書』卷四則天皇后本紀「則天順聖皇后武氏諱嬰、并州文水人也」。『旧唐書』卷四上高宗本紀上頭慶五年条「三月丙午、皇后宴親族鄰里故舊於朝堂、命婦婦人入會於內殿、及皇室諸親賜帛各有差、及從行文武五品以上。制以皇后故鄉并州長史・司馬各加勳級」、『旧唐書』卷三九地理志二河東道北京太原府条「文水、隋縣。武德三年、屬汾州。六年、屬并州。七年、又屬汾州。貞觀初、還屬并州。天授元年、改爲武興縣、以天后鄉里縣、與太原・晉陽並爲京縣。神龍元年、依舊爲文水」。
- (10) 李樹民「唐詩中の『明月峽』考論」(『襄樊學院學報』第三二卷第七期、二〇一一年、五六〜六一頁)。
- (11) 『雍正』四川通志』卷二三山川保寧府広元県条「明月峽。在縣北八十里。一名朝天峽。江流所經」。『輿地紀勝』卷一八四利州路

利州景物下条「朝天嶺。在州北五十里。路經紀險。其後即朝天程。舊路在朝天峽棧閣、遂開此道、人甚便之」。伝世文献上の関連記載は藍勇「巴蜀の朝天の地名変遷考」(『重慶歴史文化』二〇一〇年第七期、八四〜八六頁)。

- (12) 嘉靖『四川総志』卷六保寧府公署条「朝天水驛。治北八十里」。
- (13) 『蜀王本紀』「秦惠王本紀」曰、秦惠王欲伐蜀、乃刻五石牛、置金其後。蜀人見之、以爲牛能大便金。牛下有養卒、以爲此天牛也、能便金。蜀王以爲然、即發卒千人、使五丁力士拖牛成道、致三枚於成都。秦道得通、石牛之力也。後遣丞相張儀等隨石牛道伐蜀焉」。
- (14) 金牛道の変遷については、嚴耕望『唐代交通図考』(中央研究院歷史語言研究所、一九八五年、八六三〜九〇六頁)、藍勇『四川古代交通路線史』(西南師範大學出版社、一九八九年)、孫啓祥「金牛古道演變考」(『歷史地理』第二三輯、二〇〇八年、三〇九〜三一七頁)、劉慶柱・王子今主編『中國蜀道』(三秦出版社、二〇一五年)、李久昌「金牛道早期史考述」(『成都師範學院學報』第三二卷第八期、二〇一六年、六一〜六五頁)、彭邦本「金牛道的起源和早期發展」(『中華文化論壇』二〇一九年第三期、三〇〜三六頁)、金国林「試析戰國秦漢時期的葭萌与石牛道」(『四川文物』二〇二〇年第六期、二四〜三三頁)、楊棟「蜀道金牛道広元段路線變遷試析」(『四川文物』二〇二三年第五期、九四〜一〇五頁)、鄭万泉・唐飛「司馬錯入蜀相關地理及其遺存研究」(『四川文物』二〇二三年第六期、八七〜九四頁)、鄧阿蓮「蜀道金牛道北段改線的地理背景与考古学証拠」(『四川文物』二〇二三年第六期、九五〜一一頁)、張仲裁「唐宋金牛道北段路線之變遷——以歷代紀行詩爲中心的考察」(『社会科学研究』二〇二四年第六期、六一〜七〇頁)。
- (15) 藍勇注(14)前掲書(七〜八頁)、李久昌注「四前掲論文(六一〜六五頁)、彭邦本注(14)前掲論文(三〇〜三六頁)。
- (16) 楊曙光「青川木牘・呂不韋戈与先秦金牛道的関連探析」(『東方

収蔵』二〇二四年第一〇期、一九〇二頁)、鄭万泉・唐飛「司馬錯入蜀相関地理及其遺存研究」(『四川文物』二〇二三年第六期、八七〇九四頁)、鄧阿蓮「蜀道金牛道北段改線の地理背景与考古学証拠」(『四川文物』二〇二三年第六期、九五〇一一頁)は、金牛道周辺秦漢遺跡を紹介。

(17) 『輿地紀勝』卷一八四利州路利州景物下条「籌筆驛。在綿谷縣去州北九十九里。舊傳諸葛武侯出師、嘗駐此。唐人詩最多」。

(18) 藍勇「從金牛道籌筆驛名実看中国伝統郷土歴史思構」(『中華文化論壇』二〇二一年第一期、四五〇四六頁)、劉玉国・張朝碧「籌筆驛。非「朝天驛」・金牛道籌筆驛地望考」(『陝西理工大学学报(社会科学版)』第四二卷第三期、二〇二四年、六七頁)。

(19) 藍勇注(18) 前掲論文(三九〇四八頁)、藍勇「論形式邏輯・史源学在地方史地研究中的作用——以金牛道籌筆驛位置再討論为中心」(『地方文化研究』二〇二四年第四期、一〇八頁)、粟舜成「籌筆驛。即「朝天驛」」(『巴蜀史志』二〇一八年第五期、一二〇一六頁)。

(20) 劉玉国・張朝碧注(18) 前掲論文(六七〇七七頁)。

(21) 国家文物局主編『文物地圖集 四川分冊(上)』(文物出版社、二〇〇九年、二一四頁)、国家文物局主編『文物地圖集 四川分冊(中)』(文物出版社、二〇〇九年、三七四頁)。

(22) 前掲『文物地圖集 四川分冊(中)』(三六四頁)。

(23) 『三國志』魏書卷一七徐晃伝「太祖還鄴、留晃與夏侯淵拒劉備於陽平。備遣陳式等十餘營絕馬鳴閣道、晃別征破之、賊自投山谷、多死者。太祖聞、甚喜、假晃節、令曰「此閣道、漢中之險要咽喉也。劉備欲斷絕外内、以取漢中。將軍一舉、克奪賊計、善之善者也」。太祖遂自至陽平、引出漢中諸軍。この「馬鳴閣」は明清地方志にみえ、『大明一統志』卷六八保寧府古蹟条「馬鳴閣。在昭化縣北。漢昭烈使陳式絕馬鳴閣、曹操聞之喜曰此閣過漢中之平陰乃咽喉之要路」、(雍正)『四川通志』卷二六古蹟上保寧府昭化縣条「石櫃閣

馬鳴閣。俱在縣北。昔曹操曰、此閣過漢中之平陰乃咽喉要路也」。『道光』重修昭化縣志』卷一六古蹟条は「按、即今白水岸祖石站之偏橋是也。閣道三國時軍旅往來經此」とする。

(24) 前掲『文物地圖集 四川分冊(中)』(三七四頁)。

(25) 陸游「劍南詩稿』卷三所載「籌筆驛」に「有武侯祠堂」との注記がある。

(26) 前掲『文物地圖集 四川分冊(中)』(三七四頁)。四川省文物考古研究院・西安美術学院中国芸術与考古研究所「蜀道広元段考古調査簡報」(『四川文物』二〇一二年第三期、六三頁)も漢代遺物が出土したとし、写真を掲載。

(27) 四川省文物考古研究院・西安美術学院中国芸術与考古研究所注二六前掲論文、六三頁。

(28) 『嘉靖』四川総志』卷六保寧府古蹟条「關索城。在昭化縣東。昔關索屯軍於此。『道光』重修昭化縣志』卷一六古蹟条「關索城。在治北十里。相傳索屯兵於此。『舊志』「即今板筵壩也。按、索係關公之子、事不□見而所傳遺蹟爲多」。

(29) 南征関連遺跡に關しては柿沼陽平・王博・鮫島玄樹・森田大智「二〇二四年雲南省諸葛南征関連遺跡踏査記」(『史滴』第四六号、二〇二四年、二六三〇二七〇頁)。

(30) 『(雍正)『四川通志』卷二九上陵墓保寧府条「鮑三娘墓。在昭化縣北十五里。嘉慶『四川通志』卷四五陵墓二保寧府昭化縣条「鮑三娘墓。在縣北十五里、曲回壩南、白水西岸。巨墓巖然、昔時土圻見墓門。石砌堅緻如城關之狀。内室幽黑屈曲人無敢入。今已封閉矣。『舊志』鮑氏者關索之妻也。居夔州之鮑家庄、勇力絶倫。有廉康賊求娶不允、與戰破之。關索往征不勝、遂以城降。同扶漢室云」。

(31) ヴィクトル・セガレン注(4) 前掲書(二頁)。

(32) 『史記』卷七〇張儀列伝「昔蜀相攻撃、各來告急於秦。秦惠王欲發兵以伐蜀、以爲道險狹難至、而韓又來侵秦、秦惠王欲先伐韓、

後伐蜀、恐不利、欲先伐蜀、恐韓襲秦之敵。猶豫未能決。司馬錯與張儀爭論於惠王之前……卒起兵伐蜀、十月、取之、遂定蜀、貶蜀王更號爲侯、而使陳莊相蜀。蜀既屬秦、秦以益疆、富厚、輕諸侯。『華陽國志』卷一巴志「周顯王時、楚國衰弱、秦惠文王與巴蜀爲好。蜀王弟苴私親於巴、巴蜀世戰爭。周慎王五年、蜀王伐苴侯、苴侯奔巴、巴爲求救於秦。秦惠文王遣張儀、司馬錯救苴巴、遂伐蜀、滅之。儀貪巴道之富、因取巴執王以歸、置巴蜀及漢中郡、分其地爲二縣。『華陽國志』卷三蜀志「蜀王別封弟苴萌於漢中、號苴侯、命其邑曰苴萌焉。苴侯與巴王爲好、巴與蜀讐、故蜀王怒、伐苴侯。苴侯奔巴、求救於秦。……周慎王五年秋、秦大夫張儀、司馬錯、都尉墨等從石牛道伐蜀、蜀王自於苴萌拒之、敗績。王遂走至武陽、爲秦軍所害。其傅相及太子退至逢鄉、死於白鹿山、開明氏遂亡。凡王蜀十二世。冬十月、蜀平司馬錯等因取苴與巴焉。」

- (33) 『三國志』蜀書卷四一霍峻傳「先主自苴萌南還襲劉璋、留峻守葭萌城。張魯遣將楊昂誘峻、求共守城、峻曰「小人頭可得、城不可得」。昂乃退去。後璋將扶禁、向存等帥萬餘人由閬水上、攻圍峻、且一年、不能下。峻城中兵纔數百人、伺其怠隙、選精銳出擊、大破之、即斬存首。先主定蜀、嘉峻之功、乃分廣漢爲梓潼郡、以峻爲梓潼太守、裨將軍。『華陽國志』卷二漢中志「建安十八年、劉先主自苴萌南攻州牧劉璋、留中郎將南郡霍峻守葭萌城。張魯遣將楊昂誘峻求共城守、峻曰「小人頭可得、城不可得也」。昂退、劉璋將向存、扶禁由巴、閬水攻峻、歲餘不能克。峻衆才八百人、存衆萬計、更爲峻所破、敗退走。成都既定、先主嘉峻功。」

- (34) 『水經注』卷二〇漾水注「晉壽、卽蜀王弟苴萌所封爲苴侯邑、故遂名城爲葭萌矣。劉備改曰漢壽、太康中又曰晉壽。水有津關。」
- (35) 陳衛東「四川広元昭化區土基壩和擺宴壩考古調查取得重要成果」《中國文物報》第一版、二〇一四年九月一九日、一頁。
- (36) 『華陽國志』卷二漢中志「晉壽城。……大將軍費禕葬此山。」大

明一統志」卷六八保寧府陵墓條「費禕墓。在昭化縣。禕蜀漢大將軍。卒葬于此」。〔嘉慶〕四川通志」卷四五陵墓二保寧府昭化縣條「費公敬侯墓之墓。國朝雍正十三年、果親王入蜀、爲之立碑、大書「深謀卓識」。〔道光〕重修昭化縣志」卷一四祠廟條「費敬侯祠在社稷壇之西。祀蜀漢費公禕也。舊祠今毀。乾隆五十年秋七月、邑人士建祠墓左。〔道光〕重修昭化縣志」卷一五陵墓條「漢費禕墓。在西門外、社稷壇之南。大墳一座四圍有牆。舊設過樓、三楹覆諸墳上。墳前有碑書曰「漢尚書令費公敬侯之墓」。具後牆樓皆毀、石碑亦亡。邑令吳天木有志、修葺而未逮也。雍正十三年、果親王入蜀、大書「深謀卓識」□字俾邑令勒諸石。乾隆二十七年、邑令吳邦煥建立碑亭□葺墓豎碑、而樹坊道左道。道光十九年、署令毛士驥建對奕草堂三楹於碑亭後。餘修武侯祠移建草堂於費公祠後」。

- (37) 唐志功「四川広元出土一批漢代銅器」《考古》一九九〇年第五期、四七七頁。
- (38) 万靖「昭化大坪子墓地」《四川考古》<https://www.sckg.com/qinhan/1785.html> 二〇二五年七月二六日閱覽。前揭土基壩遺跡も含め、二〇一〇年以降の四川での発掘成果は、陳衛東・周科華・陳劍「二〇一〇年以來四川考古的拓展与創新」《文化文化論壇》二〇二二年第四期、三二一～四六頁）参照。
- (39) 前掲『文物地圖集 四川分冊（上）』（二一〇～二一一・二二〇～二二二頁）。
- (40) 『大明一統志』卷七三龍州宣撫使祠廟條「諸葛亮廟。在司東一百七十里。初州人以魏將鄧艾伐蜀嘗經於此立廟祀之。宋知州洪咨夔毀其像、更祀諸葛、告其民曰「母事仇而忘父母」、『宋史』卷四〇六洪咨夔列傳「毀鄧艾祠、更祠諸葛亮、告其民曰「母事仇讎而忘父母」、『咸淳臨安志』卷六七「知龍州。龍產砂汞、不取銖兩。毀鄧艾祠、改祠武侯」。
- (41) 注(23)を参照。

(42) 四川省博物館・青川県文化館「青川県出土秦更修田律木牘」(『文物』一九八二年第一期、一〇二頁)。四川省文物考古研究院・青川県文物管理所「四川青川県郝家坪戰國墓群M五〇發掘簡報」(『四川文物』二〇一四年第三期、一三〇頁)。四川省文物考古研究院・青川県文物管理所「四川青川県郝家坪戰國墓群二〇一〇年發掘簡報」(『四川文物』二〇一六年第三期、五〇二頁)。

(43) 前掲「四川青川県郝家坪戰國墓群M五〇發掘簡報」(一七〇頁)。

(44) 『三國志』蜀書卷四四姜維傳「及鍾會將向駱谷、鄧艾將入沓中、然後乃遣右車騎廖化詣沓中爲維援、左車騎張翼・輔國大將軍董厥等詣陽安關口以爲諸圍外助。比至陰平、聞魏將諸葛緒向建威、故住待之。月餘、維爲鄧艾所摧、還住陰平。鍾會攻圍漢・樂二城、遣別將進攻關口、蔣舒開城出降、傅僉格鬪而死。會攻樂城、不能克、聞關口已下、長驅而前。翼・厥甫至漢壽、維・化亦舍陰平而退、適與翼・厥合。皆退保劍閣以拒會。會與維書曰「公侯以文武之德、懷邁世之略、功濟巴・漢、聲暢華夏、遠近莫不歸名。每惟疇昔、嘗同大化、吳札・鄭喬、能喻斯好。」維不答書。列營守險。會不能克、糧運縣遠、將議還歸」。『大明一統志』卷六八保寧府古蹟條「劍閣。在劍州北三十里。崖峻拔、鑿石架閣、而爲棧道、連山絕險、故謂之劍閣。秦司馬錯由此道伐蜀」。雍正『四川通志』卷二六古蹟上保寧府劍州條「姜維城。在劍門關絕頂。姜維爲鍾會所敗、退保劍閣、屯兵於此」。

(45) 『水經注』卷二〇漾水注「又東南逕小劍戍北、西去大劍三十里、連山絕險、飛閣通衢、故謂之劍閣也」。

(46) 『元和郡縣圖志』卷二二利州條「小劍故城、在縣西南五十一里。小劍城去大劍戍四十里、連山絕險、飛閣通衢、故謂之劍閣道。自縣西南逾小山入大劍口、即秦使張儀・司馬錯伐蜀所由路也、亦謂之石牛道」。

(47) 前掲『文物地圖集 四川分冊(中)』(三八一頁)。

(48) 『嘉慶』四川通志』卷三五祠廟二保寧府劍州條「忠勤祠。在州北劍關祀蜀漢姜維」にもみえる。

(49) 『大明一統志』卷六八保寧府祠廟條「鄧將軍廟。在劍州。魏將軍鄧艾爲鍾會所誘、歿於綿竹。後葬于此、邑人爲立廟」。『嘉慶』四川通志』卷四五陵墓二保寧府劍州條「鄧艾墓。在州北二十里。孤玉山下、艾爲魏將滅蜀、姜維以計殺之、遂葬於此」。

(50) 宋・王象之『蜀碑記』「魏大尉鄧艾神廟記」、「鄧艾衛聖侯碑」。

(51) 『五代史記注』卷六三上前蜀世家「天漢元年正月、封張飛爲靈應王、鄧艾爲彰順王、張儀爲昌化王」。

(52) 『大明一統志』卷六八保寧府祠廟條「武侯廟。在葛山上。武侯、蜀漢諸葛亮也」。同山川條「葛山。在梓潼縣北二十里。漢諸葛亮嘗屯營此山、因名」。咸豐『梓潼縣志』卷一寺條「葛山。縣西三十里。一名亮山。今名臥龍山。昔諸葛武侯置營於此。有葛山寺、久圯。寺後有泉、石刻孔明泉、今猶引溉有田畝。寺石有盤石如車輪、由石穴轉折而入内□石龕佛像石碑鐫、唐貞觀年立」。咸豐『梓潼縣志』卷二祠廟條「武侯廟。縣西三十里葛山上。有八卦井。今廟與井俱湮沒」。

(53) 『梓潼縣三國演義學會學刊』第四八期(二〇二一年)・第四九期(二〇二二年)・第五〇期(二〇二四年)。

(54) 『梓潼縣三國演義學會學刊』第四八期(二〇二一年、五八〇頁)。

(55) 『咸豐』梓潼縣志』卷一寺條「葛山。縣西三十里。一名亮山。今名臥龍山。昔諸葛武侯置營於此。有葛山寺、久圯。寺後有泉、石刻孔明泉、今猶引溉有田畝」。

(56) 『三國志』蜀書卷四〇李嚴傳「乃廢平爲民、徙梓潼郡。十二年、平聞亮卒、發病死」によれば、李嚴(當時は改名して李平)は梓潼郡で死没した。

(57) 『梓潼縣三國演義學會學刊』第五〇期(二〇二四年、四四〇頁)・九三〇頁。なお「李嚴故居」もあるらしい。『梓潼縣三國演

義学会学刊』第五〇期（二〇二四年、四九～五一頁）参照。

(58) 『大明一統志』卷六八保寧府陵墓条「鄧芝墓。在梓潼西南五里有二石闕。芝南陽人。仕蜀漢爲車騎將軍陽武亭侯」。

(59) 重慶市文化局『四川漢代石闕』（文物出版社、一九九二年、二八～三〇頁）。

(60) 『後漢書』卷八一李業列伝。

(61) 『輿地紀勝』卷一八六「李業闕。在梓潼縣西五里。舊經云、前漢侍御史李業葬此。遭赤眉毀破、二闕臨官路、其碑亦漢隸」。咸豐『梓潼県志』卷三古蹟条「李業闕。縣西五里。漢議郎李業葬此。遭赤眉毀破。二闕臨官路。其碑亦漢隸。今碑尚存詳坵墓」。『咸豐』梓潼県志』卷二祠廟条「李公祠。縣南五里。漢議郎李業。不就公孫述徵、飲藥而死。漢光武帝表其闕明、嘉靖中立祠祀之、燬於寇其基尚存」。

(62) 重慶市文化局注五九前掲書（三〇～三二頁）。

(63) 重慶市文化局注五九前掲書（二七頁）。

(64) 重慶市文化局注五九前掲書（二八頁）。『咸豐』梓潼県志』卷三坵墓条「漢侍中楊休墓。俗傳如是。有石闕十餘字僅一楊字可辨。休字無考。『漢書』亦不載楊休、亦未官梓潼未知爲何方人氏俟攷」等、真实性は早くから疑われている。

〔付記〕本稿は柿沼陽平のJSPS 科研費（24K04293）による成果の一部である。

柿沼陽平（早稲田大学文学学術院教授）

王博（中国社会科学院副研究員）

鮫島玄樹（早稲田大学博士後期課程）

『史滴』論文投稿規定（雑誌掲載）

- 一. 投稿資格は早稲田大学東洋史懇話会会員に限ります。
- 二. 原稿枚数は、本論・注・地図などあわせて四〇〇字詰め原稿用紙八〇枚以内とし、和文要旨（一二〇〇字以内）、英文タイトル、英文氏名、執筆者紹介資料を添え、ご提出下さい。
- 三. 本誌は一頁二段組で、一頁あたり五四字×二三行、一二四二字（四〇〇字詰め原稿用紙三枚）として換算いたします。また、図版は一段あたり原稿用紙一.五枚として換算しております。
- 四. 原稿のご提出にあたりましては、打ち出し原稿とデータを添え、本会宛にご郵送下さい。
- 五. 提出原稿の執筆に際しては、必ず執筆要領の規定に従って下さい。同要領は請求次第、送呈いたします。
- 六. 締切期日は七月末日とします。査読委員による審査をへて掲載を決定いたします。

〈複写される方へ〉

〈複製される方へ〉

早稲田大学東洋史懇話会では、複写複製、転載複製及びAI利用に係る著作権を一般社団法人学術著作権協会に委託しています。

当該利用をご希望の方は、（社）学術著作権協会（<https://www.jaacc.org/>）が提供している許諾システムを通じてご申請下さい。

〈How to Obtain Permission〉

Waseda University Toyoshi-Konwakai authorized Japan Academic Association For Copyright Clearance (JAC) to license our reproduction rights, reuse rights and AI ML rights of copyrighted works. If you wish to obtain permissions of these rights in the countries or regions outside Japan, please refer to the homepage of JAC (<http://www.jaacc.org/en/>) and confirm appropriate organizations to request permission.

史
滴

第
四
十
七
号

2025年12月20日印刷 2025年12月30日発行
編集兼発行 早稲田大学東洋史懇話会
印刷所 富士リプロ株式会社
〒101-0048 千代田区神田司町2-14
発行所 早稲田大学文学部アジア史コース室
〒162-8644 新宿区戸山1-24-1
URL <https://dpt-bun-tousi.w.wasedaa.jp/konwa/>
E-mail: wkonwakai@gmail.com